

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 26 日現在

機関番号：37125

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463606

研究課題名(和文) 地域在住高齢者のQOL充実へのインフォーマルサポートの活用に関する研究

研究課題名(英文) The study of practical use of informal support to enrich QOL of elderly people

研究代表者

濱野 香苗 (HAMANO, KANAE)

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号：60274586

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：2013年(B島51名、C島11名)、2014年(D市市街地51名、過疎地区54名)、QOL得点はB島・C島、過疎地区、市街地と高くなった。インフォーマルサポートは老人会等より家族や親戚等からのサポートが多く、自分でも助けていた。

2015年(QOL高群40名、低群32名)、4地域共に民生委員や駐在員より家族、隣近所、親戚からのインフォーマルサポートが多く、特に隣近所との手段的サポート(野菜のやり取り等)の授受が多くみられ、友人からの心理的サポートに群間の有意差がみられた。地域在住高齢者におけるQOL充実のためにはインフォーマルサポートの継続の重要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：Survey subjects were as follows: For 2013, 51 elderly people on Island B, 11 on Island C, and for 2014, 51 elderly people in urban areas, 54 in rural areas. QOL scores were higher in urban areas than in rural areas, with Islands B and C scoring lowest. The survey subjects received more informal support from their families and relatives than from elderly people's associations. In 2015, the group of 40 survey subjects scoring high for QOL and the group of 32 survey subjects scoring low were compared. Elderly residents in the above four areas received more informal support from their families, neighbors, and relatives than from social workers or resident officers. They gave and received material support within the neighborhood. There were significant differences related to psychological support from their friends.

The importance of continuous informal support was suggested in order to enrich the QOL of the elderly.

研究分野：老年看護学

キーワード：地域在住高齢者 インフォーマルサポート QOL 心理的サポート 手段的サポート

1. 研究開始当初の背景

高齢社会での老後の最大の不安要因である介護問題に対して、社会全体で介護を支える新たな仕組みとして導入された介護保険制度は、今年で12年が経過する。その間、平成15年には介護報酬改正を含めた見直しが行われ、平成18年からは予防重視型の介護保険制度がスタートした。在宅重視と自立支援の観点や利用者のニーズに対応したきめ細かく満足度の高いサービスの提供が強調されている。しかし、船が唯一の交通手段であるA島では限定されたサービスしか受けることができず、介護保険サービスに格差がみられる。住み慣れた地域でQOLを維持・向上しながら生活する為には、フォーマルサポートのみではなく、A島に維持継続されている観音講のような組織や互助がインフォーマルサポートとして高齢者のQOLにどのような関連があるのかを明らかにする必要がある。

平成22年度～平成24年度の科学研究費補助金基盤研究(C)を受けて「離島在住高齢者のQOL向上へのインフォーマルサポートの関連に関する研究」をA島の高齢者を対象に調査した。A島は遣唐使や朝鮮出兵にも関連した歴史のある島である。海岸部に仏教徒が、上部台地にはカトリック教徒が住み分けていた。介護保険が導入され、A島に高齢者センターが設立され、フォーマルサービスとして入浴を含むデイサービスや訪問介護が開始されたが、他の介護保険サービスは受けられていない状況であった。そこで、A島在住の高齢者のQOL、生活満足度、インフォーマルサポート、フォーマルサポートの状況を調査した。その結果、QOL高群と低群、生活満足度高群と低群の比較では、高群は老人会、ボランティア活動、観音講、信徒会、琴やカラオケグループ、高齢者の集いなどの組織に参加しており、参加することは楽しみ・生きがいでだけでなく互いの悩み事の相談の機会になっていた。低群も同様の組織に参加していたが、相談相手・楽しみのプラス面だけでなく、人間関

係に気を使うなどのマイナス面も聞かれた。民生委員や区長、家族・親戚・隣近所・友人などからのインフォーマルサポートの授受は、高群では相談などの心の支えの授受、野菜・魚・おかずなど物質的な授受であった。低群では相談相手や食材をもらうサポートを受けていたが、半数以上は自分ではサポート役割を取れない人であった。A島のインフォーマルサポートの特徴は根底には血縁関係が存在し、野菜・魚・おかずなどの授受は特別なことではなく、日常的に当たり前として自然に行われているところであった。交通の便が悪く隔絶された状態のA島の高齢者がQOLを維持・向上しながら生活する為には、介護保険のようなフォーマルサポートばかりでなく、地域に存在する観音講のような組織や地域住民によるインフォーマルサポートが重要であることが明らかになった。しかし、物流資源の少ないA島のインフォーマルサポートは島民の生活に必要なものとして長い間血縁関係を根底に形成されてきた独特のものであり、人間関係が疎遠になっている現代社会において、どの地域においても高齢者のQOL向上へのインフォーマルサポートの活用が可能であろうか。

高齢者のQOLに関連する要因の研究は多くなされておられ、原らは社会的ネットワークや地域活動等が主観的健康やQOLに関連している可能性を示唆している。またQOLとソーシャルサポートとの関連では、讃井らは高齢者の生きがい感に繋がっているものは人との繋がりであると述べている。しかし、高齢者のQOLにインフォーマルサポートがどのように関連しているのかを複数の地域で調査し、地域比較をした先行研究は皆無であった。

そこで、A島で得られた知見を基に、調査地域を拡大し、地域在住高齢者のQOLの充実へのインフォーマルサポートの有効性と一般化の可能性を明らかにすることにした。

2. 研究の目的

フォーマルサポートに格差がある離島や限界集落に在住する高齢者のみならず地域在住高齢者のQOLの充実へのインフォーマルサポートの有効性および一般化の可能性の示唆を得ることをねらいとして、以下の3点を研究目的とする。

(1)平成25年度は、B島(仏教徒在住)・C島(カトリック教徒在住)在住の65歳以上の高齢者のQOLとインフォーマルサポートの状況を明らかにする。

(2)平成26年度は、D市(市街地・過疎地区)在住の65歳以上の高齢者のQOLとインフォーマルサポートの状況を明らかにする。

(3)平成27年度は、B島・C島・D市在住の65歳以上の高齢者のQOL高群とQOL低群から各10名を選んで面接調査を行い、高齢者のQOLにどのようなインフォーマルサポートが関連しているのかを質的に明らかにし、インフォーマルサポート活用の一般化の可能性を検討する。

3. 研究の方法

(1)平成25年度

対象：B島・C島在住65歳以上の男女の高齢者70名

研究方法：構成的質問紙を用いた面接による調査
調査内容：

性別、年齢、家族構成、教育歴、宗教、WHO/QOL尺度、老研式活動能力指数、対人関係、フォーマルサポートの状況(介護保険の認定とサービス利用の有無、診療所、駐在所、郵便局、漁協等からどのようなサポートを受けているのか)、インフォーマルサポートの状況(老人会、班、信徒会、婦人会等への参加状況とどのようなサポートを受けているか、自分は提供しているのか、民生委員、区長、家族、隣近所、親戚、友人、仲間等からどのようなサポートを受けているのか、サポートを提供しているのか)

研究計画：

4月～5月 質問紙の作成

6月～7月 調査依頼と調査時期の調整 本学倫理委員会の研究の承認を得る。B島・C島の代表者に連絡をとり、島での研究の承認を得て調査時期を調整する。事前に対象者への調査連絡を依頼する。

8月～11月 面接調査の実施 島内の移動手段の確保について地区代表者と打ち合わせを行う。各家庭を訪問し、調査の目的、方法、プライバシーへの配慮等を説明し、調査に同意が得られた場合は同意書に署名を得て、質問紙を用いた面接調査を行う。再度細かな面接調査を依頼する可能性があることを説明しておく。

12月～1月 データの整理および分析

2月～3月 研究のまとめ

(2)平成26年度

対象：D市(市街地および過疎地域)在住65歳以上の男女の高齢者合計70名

研究方法：構成的質問紙を用いた面接による調査
調査内容：

性別、年齢、家族構成、教育歴、宗教、WHO/QOL尺度、老研式活動能力指数、対人関係、フォーマルサポートの状況(介護保険の認定とサービス利用の有無、病院、警察、郵便局、社会福祉協議会等からどのようなサポートを受けているのか)、インフォーマルサポートの状況(老人会、班、婦人会等への参加状況とどのようなサポートを受けているか、提供しているか、民生委員、駐在員、家族、隣近所、親戚、友人等からどのようなサポートを受けているか、提供しているか)

研究計画：

4月～5月 質問紙の作成

6月～7月 調査依頼と調査時期の調整 D市保健福祉部および社会福祉協議会に協力を依頼し、地域の高齢者センター等での調査の承認を得て、調査時期を調整する。

8月～11月 面接調査の実施 市街地および過疎地域の高齢者センターを訪問し、調査の目的、方法、プライバシーへの配慮等を説明し、調査に同意が得られた場合は同意書に署名を得て、質問紙を用いた面接調査を行う。再度細かな調査を依頼する可能性があることを説明し、協力希望者には連絡方法を確認する。

12月～1月 データの整理および分析

2月～3月 研究のまとめ

(3)平成27年度

対象：各地域のQOL高群10名ずつ合計40名、QOL低群10名ずつ合計40名

研究方法：インタビューガイドを用いた面接による調査

調査内容：

老人会、班、信徒会、趣味の会等への参加状況、各組織から心理的サポートおよび手段的サポートとしてどのようなサポートを受けているか、どのようなサポートを提供しているか、民生委員、駐在員、家族、隣近所、親戚、友人、仲間等から心理的サポートおよび手段的サポートとしてどのようなサポートを受けているか、自分はどのようなサポートを提供しているか

研究計画：

4月～5月 インタビューガイドの作成

6月～7月 調査依頼と調査時期の調整 B島・C島の地区代表者およびD市の保健福祉部・社会福祉協議会に連絡をとり、研究の承認を得て、調査時期を調整する。

8月～11月 面接調査の実施 B島・C島内の移動手段の確保について地区代表者と打ち合わせを行う。D市の調査希望者に調査依頼を行い、高齢者センターにて調査の目的、方法、プライバシーへの配慮等を説明し、調査に同意が得られた場合は同意書に署名を得て、インタビューガイドを用いて面接調査を行う。許可が得られれば録音を行う。

12月～1月 データの整理および分析 得られたデータを逐語録にし、質的帰納的に分析する。

2月～3月 研究のまとめ、論文作成

4. 研究成果

(1)平成25年9月～平成26年2月、構成的質問紙を用いて面接調査した。B島在住高齢者51名(男性18名、女性33名)から協力が得られた。年齢は65歳から88歳、平均77.2歳、家族構成は配偶者と二人暮らし23名、子どもと同居11名、独居8名、配偶者と子どもと同居6名、教育歴は中学卒38名、小学卒13名、宗教は全員仏教徒、QOL得点は5点満点で2.15～4.04点、平均3.20点、老研式活動能力指数は13点満点で1～13点、平均8.9点、相談や緊急時対応する人がいる48名、介護保険の認定を受けているのは8名で電動車いす6名、デイサービス・訪問リハビリ1名、フォーマルサポートは5～10点、平均7.2点、インフォーマルサポートを老人会等から受けた49.0%、自分が助けた39.2%、家族等から受けた74.5%、自分が助けた56.9%であった。C島在住高齢者は11名(男性5名、女性6名)年齢は71歳から85歳、平均77.5歳、家族構成は配偶者と子どもと同居4名、子どもと同居3名、配偶者と二人暮らし2名、独居2名、教育歴は中学卒9名、小学卒2名、宗教は全員カトリック教徒、QOL得点は2.54～3.85点、平均3.16点、老研式活動能力指数は3～12点、平均7.8点、相談や緊急時対応する人がいる11名、介護保険の認定は0名、フォーマルサポートは6～8点、平均6.7点、インフォーマルサポートを老人会等から受けた45.5%、自分が助けた45.5%、家族等から受けた72.7%、自分が助けた63.6%であった。QOL得点はB島、C島で差は見られなかった。インフォーマルサポートは老人会等よりも家族や親戚等から受けることが多く、自分でも助けていた。フォーマルサポートの差は公的機関の有無によると思われる。

(2)平成26年8月～平成27年3月、構成的質問紙を用いて面接調査した。D市市街地在住高齢者51名(男性17名、女性34名)から協力を得た。年齢は65歳から89歳、平均76.0歳、家族構成は配偶者と二人暮らし15名、子どもと同居13名、独居7名、配偶者と子どもと同居14名、教育歴は小学校卒2名、中学卒7名、高校卒27名、短大以上卒12名、宗教は仏教徒45名、QOL得点は2.31～4.69点、平均3.76点、老研式活動能力指数は8～13点、平均11.5点、相談や緊急時対応する人がいる46名、介護保険の認定を受けていたのは1名でサービスは受けていなかった。フォーマルサポートは5～9点、平均6.4点、インフォーマルサポートを老人会等から受けた21.6%、自分が助けた29.4%、家族等から受けた64.7%、自分が助けた70.6%であった。D市過疎地区在住高齢者は54名(男性25名、女性29名)、年齢は65歳から85歳、平均74.1歳、家族構成は配偶者と二人暮らし20名、子どもと同居7名、独居5名、配偶者と子どもと同居19名、教育歴は小学校卒4名、中学卒34名、高校卒12名、短大以上卒4名、宗教は仏教徒46名、QOL得点は2.77～4.81点、平均3.68点、老研式活動能力指数は8～13点、平均11.4点、相談や緊急時対応する人がいる46名、介護保険の認定を受けていたのは1名でサービスは受けていなかった。フォーマルサポートは5～10点、平均6.6点、インフォーマルサポートを老人会等から受けた22.2%、自分が助けた38.9%、家族等から受けた61.1%、自分が助けた72.2%であった。

QOL得点は市街地と過疎地区で差が見られた。インフォーマルサポートは老人会等よりも家族や親戚等から受けることが多く、自分でも助けていた。フォーマルサポートの差は社会福祉協議会によるサロン参加者数が影響していると思われる。

(3)B島・C島・D市2地区在住高齢者のQOL得点高群と低群に、平成27年10月～平成28年2月、インタビューガイドによりインフォーマルサポー

トの状況を面接調査した。QOL得点は5点満点で高群3.19～4.69点(平均3.94点)、低群2.54～3.42点(平均3.01点)であった。高群は40名、平均年齢76.2歳、低群は32名、平均年齢78.9歳、組織参加は高群は老人会40.0%、班活動27.5%、ボランティア15.5%、趣味の会25.0%、低群は老人会37.5%、班活動25.0%、ボランティア9.4%、趣味の会15.6%であった。心理的サポートを受けたは、高群は民生委員15.0%、駐在員12.5%、家族35.0%、隣近所25.0%、親戚25.0%、友人40.0%、仲間25.0%、低群は民生委員6.3%、駐在員9.4%、家族46.9%、隣近所31.3%、親戚25.0%、友人15.6%、仲間9.4%、自分の提供は高群は民生委員5.0%、駐在員7.5%、家族37.5%、隣近所27.5%、親戚37.5%、友人40.0%、仲間27.5%、低群は駐在員3.1%、家族25.0%、隣近所25.0%、親戚18.8%、友人18.8%、仲間9.4%であった。手段的サポートを受けたは、高群は民生委員15.0%、駐在員10.0%、家族42.5%、隣近所70.0%、親戚52.5%、友人40.0%、仲間22.5%、低群は民生委員9.4%、駐在員3.1%、家族50.0%、隣近所62.5%、親戚59.4%、友人34.4%、仲間21.9%、自分の提供は高群は民生委員5.0%、駐在員5.0%、家族35.0%、隣近所67.5%、親戚47.5%、友人42.5%、仲間30.0%、低群は家族43.8%、隣近所56.3%、親戚40.6%、友人25.0%、仲間15.6%であった。インフォーマルサポートの高齢者の生活への影響は高群45.0%、低群46.9%が助かると述べていた。

QOL高群、低群共に民生委員や駐在員からのサポートより家族、隣近所、親戚からが多く、特に隣近所との手段的サポート(例えば野菜のやり取り等)の授受が多かった。また友人からの心理的サポートは群間に有意差が見られた。これは全地域で見られ、地域在住高齢者にとってインフォーマルサポートは必要かつ大事なことであり、QOL充実に意義がある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計12件)

Kanae Hamano, Concerning the Care of Residents from 43 to 65 Years Old on a Remote Island, 11TH International Family Nursing Conference, 2013. 6. 20, Hyatt Regency Minneapolis Minnesota (USA)

濱野香苗, 離島在住第2号被保険者の介護保険に関する考えと家族構成、日本家族看護学会第20回学術集会、2013.9.1、静岡県立大学 (静岡県)

濱野香苗, 43~65歳の離島在住者の介護に関する考え、第62回日本農村医学会学術総会、2013.11.8、福島グリーンパレス・福島ビューホテル・コラッセふくしま (福島県)

濱野香苗他、離島在住第2号被保険者のインフォーマルサポートに関する考え、第33回日本看護科学学会学術集会、2013.12.7、大阪国際会議場 (大阪府)

濱野香苗, 離島在住高齢者のQOLと家族構成、日本家族看護学会第21回学術集会、2014.8.9、川崎医療福祉大学 (岡山県)

濱野香苗, 離島在住高齢者のQOLと宗教、第63回日本農村医学会学術総会、2014.11.14、つくば国際会議場 (茨城県)

濱野香苗他、離島2島在住高齢者のインフォーマルサポートの状況、第34回日本看護科学学会学術集会、2014.11.30、名古屋国際会議場 (愛知県)

Hamano K., Family structure connections and quality of life of elderly residents on a remote island and in an urban area, 12th

International Family Nursing Conference, 2015.8.19, Odense (Denmark)

Hamano K., Quality of Life of elderly people on a remote island: a comparison between urban and rural areas, 2015.9.9, Lodi (Italy)

濱野香苗, A市在住高齢者のQOLと家族構成市街地と過疎地の比較、日本家族看護学会第22回学術集会、2015.9.6、国際医療福祉大学小田原保健医療学部 (静岡県)

濱野香苗, 離島および市街地在住高齢者のQOL、第64回日本農村医学会学術総会、2015.11.23、秋田県民会館 (秋田県)

濱野香苗, A市の市街地と過疎地在住高齢者のインフォーマルサポートの状況、第35回日本看護科学学会学術集会、2015.12.5、広島国際会議場 (広島県)

[図書] (計0件)

[産業財産権] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱野 香苗 (HAMANO KANAE)

聖マリア学院大学・看護学部・教授

研究者番号: 60274586

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

なし